

〔研究論文〕

昭和期の真言宗と「喇嘛教」

—— 田中清純を中心に ——

高 本 康 子

要 旨

昭和戦時期、すなわち満洲事変から1945（昭和20）年の終戦までの昭和期において、日本の外務省、軍部そして仏教各派が、当時「喇嘛教」と呼称されたチベット仏教に対して様々な活動を行っていたことに関しては、現在未調査の部分が大きい。本稿はその中でも、真言宗に注目し、満洲国建国前後に行われた、チベット仏教第二の活仏パンチェンラマとの接触の様様を、中心人物の一人田中清純に焦点をあてて考察する。

【キーワード】 昭和期 真言宗 喇嘛教 チベット仏教 田中清純 パンチェンラマ

1. はじめに

第二次世界大戦期に、日本の外務省および陸軍関係諸機関が行ったチベット仏教に対する諸施策についての研究としては、主なものとして以下3人の研究が挙げられる。

大陸における昭和期日本の「喇嘛教」施策について、最初に言及したのは、アメリカの東洋史学者ポール・ハイヤー（Paul Hyer）である。彼は1950年代以来これについて、幅広く調査しており¹⁾、特に貴重であると思われるのは、史料に、アメリカ接収の外交史料の他、まだ当時健在であった関係者へのインタビューが含まれる点である。

一方、房建昌「日本侵蔵秘史—日本有関西蔵的秘密報告和遊記」（『西蔵研究』1998年第1期、49-55頁）は、中国人による当該課題研究のさきがけとなるものであり、以後の研究を方向づけたものの一つと思われる。入蔵者の手記、関係者の回想を取り上げているが²⁾、日本語資料の記述に関して検討が若干不足であると見受けられる部分もある³⁾。

最も詳細な記述は秦永章『日本涉蔵史』（北京、中国蔵学出版社、2005年）第8-9章である。昭和期については、上記二人が使用した資料に加え、中国側の外交史料を併用して検討した点が優れていると言える。しかし関心の焦点がチベットであるため、いわゆる「蒙疆」および「満洲」地域での「喇嘛教」施策についての記述は十分とはいえない。

更に、日本仏教各派と「喇嘛教」との関係については、ナランゴアの *Japanische Religionspolitik in der Mongolei 1932-1945* (Wiesbaden, Harrassowitz, 1998) がある。これは昭和期の日本仏教による、主に「蒙疆」と呼ばれた地域での活動を取り上げたもので、各派の機関誌と一部の個人資料を調査し詳述したものである。また、「喇嘛教」との関係を中心にしたものではないが、本稿で取り上げる真言宗の活動について非常に有益な調査成果として、神奈川県平塚市の東寺真言宗宝善院住職松下隆洪によって、主に真言宗系の諸雑誌、すなわち『密厳教報』、『高野山時報』、『六大新報』等の記事を博搜して作成された年表「真言宗中国開教史」(<http://www.houzenin.jp>) がある。

本稿で考察の対象とする田中清純(1876-1941)は、真言宗に属する僧侶であり、1932(昭和7)年の満洲国建国前後から太平洋戦争開戦前夜まで、真言宗の対「喇嘛教」活動における中心的な存在の一人であったと言い得る人物である。彼について、以上の先行研究において、最も詳細な記述は前掲「真言宗中国開教史」所載の28項目であり、その他ではほとんど言及されていない⁴⁾。本稿はこの点をふまえ、特に「喇嘛教」との関わり契機となった1932(昭和7)年の中国訪問を中心に、彼の著作や個人資料を調査し、その活動に対する基礎的な分析と考察の第一段階とすることを目的とする。

2. 昭和期日本における対チベット仏教施策

以上の先行研究を参照し、これらを適宜補足しつつ、昭和期における日本の対チベット仏教諸施策を以下、概観することとしたい。これは、情報収集と、主要人物の来日招請⁵⁾、および寺院組織の「改革」の三種に大別される。

その最初の典型例は、1920年代半ばから1930年代初めにかけての、パンチェンラマを目標とした活動であると思われる。秦永章によれば、パンチェンラマ来日は実現しなかったが、パンチェンとの関係を作るために、日本人による同ラマへの弟子入り申し入れが続いたという(秦『日本涉蔵史』、199、201頁)⁶⁾。

パンチェンラマに対する工作が行われたのは、同ラマがチベット仏教圏においてダライラマに次ぐ宗教的権威を持つという、その政治的影響力の大きさに注目されたことによる。ダライラマ勢力との対立から、同ラマは1923(大正12)年にチベットを去り、1925(大正14)年に北京に到着、以後逝去する1937(昭和12)年まで、チベット帰還を望みつつ、戻ることはなかった。この間、パンチェンラマのチベット帰還をめぐる、蒋介石政権とダライラマ側との間に何回かの交渉があった。双方は、同ラマ帰還の際の中国兵同行の是非、また中国の一部としてチベットを認知するかの2点で一致せず、交渉は成立しなかった(シャカツパ『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所、1992年、345-349頁)。日本側の注目も、パンチェンラマの持つこの影響力に対してであり、「満蒙」での「喇嘛教工作」において、その活用の機会を探る段階にあったと推測される。

1930年代に入ると、パンチェンラマではなく、同ラマ周辺の重要人物、例えば側近の安欽呼図克圖^{アンチンフトクト}などへの働きかけが試みられた(秦『日本涉蔵史』、204-210頁)。いずれも日本への招待が中心であっ

たが、実現していない。しかし安欽呼図克図は、1939（昭和14）年には日本当局の依頼を受け、日本人調査員野元甚蔵をチベットへ同行した⁷⁾。

日中戦争の展開とともに、1940年代に入ると、「満蒙」地域における「喇嘛教」に対する動きは活発化する。この時期の活動は、「満蒙」地域の宣撫工作における主要な柱の一つとして「喇嘛教」に注目し、その組織化と改革を目指したものである。例えば内蒙古（「蒙疆」）においては、陸軍の情報将校幽経義隆中尉⁸⁾を中心に、「喇嘛教」工作が行われた⁹⁾。幽経は1941（昭和16）年10月、「ラマ教団」研究を命ぜられ、4ヶ月後、その結果を「ラマ教団工作実施計画要綱案」にまとめ駐蒙軍に提出した。この「要綱」は、蒙古連合自治政府に、軍命令として下達されたという。同時に、この工作に関する日本側の指導責任者として、駐蒙軍は幽経を同政府の「無給嘱託」とした（幽経虎崑『おかげさま—私の人生何十年』幽経虎崑、1985年、62-64頁）。

この「要綱案」によって実施された施策の内容は、以下のようなものである。

- ① 各寺院への「ラマ印務所」設置。これは、蒙古連合自治政府における、内蒙古のチベット仏教寺院と僧侶を統括する宗教行政の実効性を高めるために、清代に各寺院におかれていた「印務処」を模した「ラマ印務所」を、同政府に連続する機関として設置しようというものである。1942（昭和17）年、同政府所在地である張家口において、「有力活仏の代表者大会」が開催され¹⁰⁾、「ラマ印務所」が発足したとされる（幽経『おかげさま—私の人生何十年』、78-80頁）。
- ② 活仏転生工作。有力な活仏を日本当局の影響下に置き、これらの活仏を通じて宣撫工作の有効性を高めるために試みられたものである。これについては、当時ソ連勢力下にあった外蒙古地域のモンゴル系住民への働きかけという意味もあり、同地域の活仏を、内蒙古もしくは満洲に転生させることが目標とされた。これは幽経の工作以前にも、外蒙古第一の活仏である哲布尊丹巴呼図克図に対して試みられ、失敗におわっている¹¹⁾。幽経の工作において候補者とされたのは、「ノイン活仏」¹²⁾で、蒙古連合自治政府主席徳王を通じ、「トガン活仏」¹³⁾の協力を得て、一人の少年僧が選ばれ同活仏として認定されるに至った。雍和宮での儀式ののち、1942（昭和17）年7月15日、「転生推戴式」¹⁴⁾が、東ソニット旗内の西ジャラン・スムで挙行された。駐蒙軍は、機密費からこの行事に多額の援助をしたという（幽経『おかげさま—私の人生何十年』、71-74頁）。
- ③ 訪日見学団派遣。1942（昭和17）年、1943（昭和18）年、いずれも4月から一ヶ月間の日程で行われた¹⁵⁾。一行は「活仏」9-10名、通訳1名、「アシスタント」1名、団長1名の構成で、所要経費一切が駐蒙軍の「機密費」から支出されたという。予算はかなり潤沢であったようで、幽経は「旅館は一級、船や汽車は三等ではなくて二等（今のグリーン車に相当）というように豪華版であった」と述べている。見学先は多岐にわたり、「製鉄工場、造船工場、自動車製造工場、機関車製造工場、製菓工場、新聞社、放送局、大学、牧畜業、各宗本山等で、主として東京、横浜、名古屋、京都、大阪、北九州等を旅行した」。訪問先として具体的に名前が挙がっている寺院には、東京池上本門寺、身延山久遠寺、高野山金剛峯寺、東西両本願寺がある。見学後ラマたちには「我が国についての所感」を書かせ、それをまとめたものを各見学先に送付したという（幽経『おかげ

げさま一私の人生何十年』、66-68頁)。

一方、昭和期において、外務省の活動があわただしくなるのは、1942(昭和17)年に入ってからである。同年2月に、外務大臣がチベット情報調査を、中国国内の各領事館に指示している¹⁶⁾。上海総領事館には、副領事岩井英一¹⁷⁾を責任者として、蒋介石政府の内情と動向についての情報を収集する「特別調査班」が設置されていたが、同年4月前後には同班から、現地住民が調査員としてチベットに派遣された。また6-7月には、北京において最高の格式を持つチベット仏教寺院雍和宮のトップ丹巴達扎の来日が実現する。この来日は極秘とされ、日本での対応は主に真言宗が担ったとされる。以上の活動については、秦『日本涉蔵史』に詳しい(228-235頁)。また丹巴達扎来日時、ラサの仏教寺院で10年余りの修行経験を持つ入蔵者多田等観が、日本側での対応に協力している¹⁸⁾。

その他、満洲国政府や蒙古連合自治政府等、現地行政当局が行った対「喇嘛教」施策に日本人がかかわった例が多数見られる。例えば真言宗では1938(昭和13)年10月、長谷川行栄を、満洲国政府の依頼によって同国熱河省承徳の八大廟所属「喇嘛僧」の「指導・監督」のため、派遣している(『高野山時報』第871号、15頁)。

3. 真言宗と「喇嘛教」

本稿では以上の動きをふまえ、特に真言宗によるチベット仏教活仏パンチェンラマとの接触をめぐる動きに注目したい。

第二次世界大戦終戦までの真言宗と「喇嘛教」との関わりには、3つの段階を見て取ることができると思われる。すなわち、①満洲国成立前後からの「「喇嘛教」への接触試行」期、②1939(昭和14)年前後からの「人材の育成」期、③1941(昭和16)年前後からの「現地での人材活用」期、である。

真言宗が「喇嘛教」に関わる活動を本格化するのには、②1939(昭和14)年前後からだと思われるが、これに先立って、いくつか散発的ともいえる接触があった。その最初は、1914(大正3)年の、在奉天の日本領事を通じた、真言宗僧侶の実勝寺(皇寺)への入寺交渉であったと思われる(『高野山時報』第31号、18頁)。この交渉結果は不明である。また、大陸での真言宗開教において、現地での中心的存在の一人であった菅野経禅が、1922(大正11)年3月、「蒙古経典」を高野山大学図書館に寄贈している(『高野山時報』第257号、16頁)。経典入手の経緯や、経典がどのような内容のものであったかは不明であるが、菅野が現地で「喇嘛教」に接触していた可能性は高い。次に登場するのが、本稿で取り上げる田中清純の活動であり、高位の僧侶がパンチェンラマという、チベット仏教でも最高位に近い宗教的権威を持つ人物と接触したという点では、1908(明治41)年の五台山における大谷光瑞名代大谷尊由とドライラマの会見以来のものであったと言えるだろう。

以上を①満洲国成立前後からの「「喇嘛教」への接触試行」期とすると、上述したように、「喇嘛教」に対する活動が活発化するののが、②1939(昭和14)年前後からの「人材の育成」期以降である。これは、1938(昭和13)年の国家総動員法施行や興亜院の設置という戦時体制の整備・運用の展開と、ノ

モンハン事件以降の日本が置かれた状況を背景にした、日本仏教の動きの一つであったと言えるだろう。

1938（昭和13）年、高橋大善が厚和（現在の呼和浩特）に「日本喇嘛研究本部」を設置し、以後ここが真言宗の対「喇嘛教」活動の現地拠点の一つとなった。翌年から、満洲・蒙疆地域へ若い日本人僧侶を派遣、現地で言語・生活習慣等の訓練を施したのち、各地の寺院へ配置するという活動が始まる¹⁹⁾。またさらにその翌年から、現地の若い「喇嘛僧」を留学生として日本の各宗寺院に受け入れることも開始された。高野山では主に興亜密教学院、また浄土宗では知恩院、西本願寺では中央仏教学院などが受け入れ先となっていたようである。これらの人材は「満蒙」現地における、いわゆる「喇嘛教改革」のために育成を図られていたと考えられる。

1941（昭和16）年前後からは、満洲国ならびに「蒙疆」におけるこの「喇嘛教改革」の動きが本格化する。例えば満洲国では、1940（昭和15）年8月、「ラマ教整備要綱」が国務院で決定され、それに基づいて同年12月、国内のチベット仏教寺院が新組織として再編成された。また「蒙疆」においては、1941年10月関東軍情報将校幽経義隆による「ラマ教工作」が開始され、翌年にかけて、有力活仏の転生工作、高位の喇嘛僧たちの日本への招致、「ラマ印務所」の設置などが、次々と実行に移されたことは、既に述べた通りである。

以上のような事業において、真言宗の人材も活用されていった。例えば1941（昭和16）年9月、10月に「蒙疆」で行われた「ラマ講習会」や、開校した「ラマ学校」の講師は、「蒙疆」に留学した日本人僧であった²⁰⁾。現地でこのような若い人材が活用されていく一方、外務省や軍部の要請で、本山からも人材が派遣されている²¹⁾。

以上の動きをふまえ、本稿で注目するのは、中日密教研究会設立を契機とした、田中清純とパンチェンラマのかかわりである。同会は、昭和初期に真言宗留学生として北京に滞在した吉井芳純の尽力によって生まれた民間団体である。彼は1930（昭和5）年にいったん帰国するが、再び大陸へ渡り、1932（昭和7）年春以降、天津と北京において、同会設立に奔走していた。

1932（昭和7）年、いよいよ同会発足が実現することとなり、本稿で考察対象とする田中清純が、同会総裁である高野山座主龍池密雄の代理として中国へ派遣されることとなった。同時期に北京では、満洲事変以来の戦災消除のため、パンチェンラマが紫禁城太和殿で時輪大灌頂を行っており、田中はこの儀式の参観を許される。パンチェンラマは、この縁を喜び、天津において行われた中日密教研究会の会館開館式に代理を派遣した。この田中との接触に続いて、前述したように、日本人が次々にパンチェンラマのもとを訪れることとなった。

1935（昭和11）年になると、中華民国政府は、パンチェンラマを西陲宣化使に任命し、その護衛として中国人兵500名を配備することとした。前述したように、パンチェンラマはチベットへの帰還を望んでいたが、チベットのダライラマ当局はこの中国人兵力を警戒してこれを許可しなかった。事態は進捗しないまま、翌年12月1日、パンチェンラマは、チベット・中国の境界付近のジェクンド（現在の玉樹）で死去した。パンチェンラマ逝去の情報はすぐに田中に伝えられ、田中は翌年1938（昭和13）

年1月に、中日密教研究会静岡支部でパンチェンラマ追弔法要を行っている。しかし田中も、その3年後の1941（昭和16）年、67歳で逝去した。

中日密教研究会はこのように、日本の真言宗が主体となって創設されたものであり、それは総裁が高野山座主の龍池密雄であったことにも、その一端がうかがえよう。しかし中国側の関わりも小さいとは言えない。例えば、発起人には、中華民国で陸軍総長、國務総理を務めた安徽派の段祺瑞（1865-1936）を筆頭に、民国政府で交通総長等を歴任し、天津市市長等を務めた直隸派の高凌霨（1870-1940）、袁世凱のもとで参議や顧問を務め、後に衆議院議長に就任する安徽派の王揖唐（1877-1948）等、中華民国における各勢力の要人が16人、名を連ねている。更に同会立ち上げ後、段が同会会長、高と王が副会長に就任したのをはじめ、同会の重要ポストに中国側の人物が多く任命されていることにも、その一端が見て取れよう²²⁾。

田中が1933（昭和8）年に中日密教研究会の設立経緯と活動をまとめ発行した『依宗教日支親善』所収「中日密教研究会設立趣意書」によれば、その「主義」は、「東亜民族」の「精神的団結」と彼此の「文化向上」、そして「綱要」は、「喇嘛教」の「真相究明」と真言密教との「互融提携」となっており、具体的な事業としては、視察団・研究員の相互派遣、中国における密教遺跡の調査研究、日中の碩学による特別密教講座開催、各種文献の編纂・翻訳・刊行、語学教育機関設置、会報発行等が挙げられている（「中日密教研究会設立趣意書」、2-3頁）。

実際の活動を見てみると、1931（昭和6）年4月24日、高野山において総裁推戴式が行われ、翌年6月19日、天津の日本公会堂で発会式、11月26日には同じく天津において、同会会館の開館式が行われた。1933（昭和8）年にはこの会館内に、同会所属の研究所に相当する中日密教学院が設置される。その翌年、同会静岡支部が田中の住持する清水寺に設置され、これはその後1939年に、「日本本部」と名称が変更された。1934（昭和9）年には同会から、中日密教学院副院長中野義照の著作『阿育王の聖業』が出版された。1935（昭和10）年、東京に同会日本総支部、また同会のサポート団体として東亜密教協会が設立された。また、この年3月7日付の『東京日日新聞』に、高野山・パンチェンラマ間の、交換留学生の話が報じられていることを田中が記録している²³⁾。その翌年1936（昭和11）年には、同会北京支部が北京五台山普化仏教總會内に設置された。五台山普化仏教会は、中国五台山を信仰する信者の団体で、200万人の信徒を擁するものであった（田中清純、藤井照純編『班禪喇嘛法王追悼余光』巻末所収、吉井芳純「従心流出の道場」、頁番号なし）。更にその翌年1937（昭和12）年には、当時の北京市長であり、同会副会長を務める江朝宗（1861-1943）が同会に、北京池子街に2,400坪の面積を持つ「風神廟」を提供し、以後ここが同会北京支部となった。同会が中国において確実に、その事業を展開しつつあったことが、以上の経緯に見て取れる。

4. 田中清純（1876-1941）の活動

田中清純は香川県に生まれ、高野山大学、東洋大学を卒業後、日露戦争に従軍、その後1906（明治

39)年、明治期日本仏教の思想的指導者の一人であり、その持戒堅固で人々の尊崇を集めていた釈雲照(1827-1909)の地方巡教に従い、国内外を訪れた。その後、逝去まで静岡県静岡市清水寺、慶寿寺の住職を勤めた²⁴⁾。その人柄により彼を慕う人々も多く、仙台藤崎デパートの前身「エビスヤ」の一人息子として生まれた藤崎三郎助(1868-1926)も、その一人である。藤崎は、本稿で取り上げる田中の大陸での活動に対しても、経済的援助をしている²⁵⁾。

上述したように田中は、中日密教研究会の立ち上げに関し、同会総裁である高野山座主龍池密雄の代理として、中国へ渡り、北京と天津に滞在した。同時期に北京にいたパンチェンラマとの交流は、これを契機に始まったものである。以下詳しくこの中国滞在看ていきたい。

4.1. 1932年の中国行き

満洲国が建国されて約半年後となる1932(昭和7)年10月8日、田中は神戸を出帆する。12日に天津到着、曹洞宗観音寺を宿所とし、天津駐在の桑島主計総領事を訪ねるなど、中日密教研究会関連の準備をした。21日、田中は桑島総領事からの電話で、北京においてパンチェンラマが21日から28日まで時輪金剛大法会を行うことを知り、それに参列するために急遽、北京へ移動することとした。23日正午到北京着、日華ホテルに投宿後、午後は公使館、弘濟寺、三字学園を訪問した(田中編『依宗教日支親善』、21頁)。24日、北京紫禁城大和殿でのパンチェンラマの時輪金剛大法会に、中日密教研究会会長・副会長らと共に出席した。この法会は田中によれば、清の乾隆帝の治世にグラライマが行って以来初めての、「二百年来の盛儀」であり、貴族から一般民衆まで数万人が参列する盛況の中、日本の僧服を着用した田中は非常に目立ったという(田中編『依宗教日支親善』、21頁)。26日、紫禁城文華殿・武英殿を見学、そののち再び大和殿でパンチェンラマの法要を見る(田中編『依宗教日支親善』、22頁)。27日、午前中は朝陽門外の陸軍墓地、東廟、国土監、孔子廟、雍和宮を参観、午後は北京日本公使館に参事官矢野真を訪問した。28日、矢野参事官の招待で昼食を共にした際、パンチェンラマとの会見について交渉を依頼した²⁶⁾。矢野が北平公安局を通じてパンチェンラマ側に問い合わせたところ、非常に好意的な返事があり、会見は翌日、実現することとなった。29日当日、田中は午前十時半、吉井芳純とともに公使館に入り、そこから通訳官原田龍一、公安局秘書吉世安と同道して紫禁城頤年殿へ行き、パンチェンラマと対面した。パンチェンラマは終始積極的で、田中との会談の中で来日の意志があることを表明する(田中編『依宗教日支親善』、27頁)²⁷⁾。

田中は31日夜、北京を発って天津に戻る。その後11月6日、田中はパンチェンラマに、両者の会見の記念として、田中の師、釈雲照の袈裟など数品を、北京公使館の原田龍一通訳経由で贈った。実際にはこれらを、矢野参事官自らが原田通訳等とともに持参し、パンチェンラマに再び会見して献上した(田中編『依宗教日支親善』、32頁)。パンチェンラマは非常に喜び、その答礼として11月15日、日本公使館を訪ねた。パンチェンラマが各国大使館を訪問したことはそれまでないことで、パンチェンラマ側における田中、真言宗、日本に対する好印象のほどがうかがわれる(田中編『依宗教日支親善』、34頁)。

一方、天津に戻った田中は11月18日、天津総領事の官邸に招待され、同会副会長の高凌霨、王揖唐

その他に紹介された（田中編『依宗教日支親善』、36頁）。会長の段祺瑞は、日本側との接触が無用な揣摩憶測を生む可能性があることを理由に、この場には出ていなかったが、20日、田中を自邸に招き、食事を共にした。この時段が田中に向かって、原内閣の対中政策について辛辣な批判をしたことが、田中の記述に残っている。しかし、一方で段は熱心な仏教信者でもあり、田中を「史上曾てなき海外の高僧」と呼び、仏教を媒介にした日中交流に賛意を示した（以上、田中編『依宗教日支親善』、37頁）。26日には中日密教研究会館で開館式が行われた。同館は四階建て、十畳間が14あるという大きな建物で、王揖唐が提供したものであった。式にはパンチェンラマ代理として喝金楚臣傾批法師が出席、祝辞を贈った（田中編『依宗教日支親善』、20頁）。

田中は11月29日、再び北京へ向かった。正午到北京着、午後7時には北京公使館に入り、パンチェンラマと田中を主賓として矢野参事官が催した食事会に参加した。随従の中には、前述したようにこの後、1939（昭和14）年に、日本当局の依頼によってチベットへ調査員野元甚蔵を同行することとなるチベット仏教の活仏安欽呼図克図の名も見える（田中編『依宗教日支親善』、74頁）。その後田中は帰国の途につき、12月19日正午、神戸に到着した。彼はそのまま高野山へ向かい、高野山座主龍池密雄に報告を行っている。

田中帰国の2日後、12月21日には『大阪毎日新聞』に、田中の談話として「班禅喇嘛近く来朝か」の記事が掲載された。従ってこの時すでに、パンチェンラマの来日希望を受けて、翌々年の1934（昭和9）年4月に高野山で行われる弘法大師千百年忌に招待する計画がある程度進行していたと考えられる。後述するがこの4年後、田中がパンチェンラマ死去の際編んだ『班禅喇嘛法王追悼余光』（1938年）には、同ラマ来日に関する新聞記事が収録されており、その後の経過が知られる（46-47頁）。すなわち、帰国翌年の1933（昭和8）年11月には、すでに、「正式招待状」が北京のパンチェンラマ事務所代表に手渡され、それが当時内モンゴルの百靈廟滞在中のパンチェンラマに送られていた²⁸⁾。しかし結局、このパンチェンラマ来日は実現せず、中日密教研究会副会長の王揖唐が来日することとなる。

その後日本へ戻った田中と、パンチェンラマとの間に、以下述べるように贈答の往復が複数回続く。また、天津の桑島総領事、北京の矢野参事官とも、親しく往来することとなった。

4.2. その後の交流

帰国の翌年1933（昭和8）年5月20日、田中は『依宗教日支親善』を出版した。前述したように、これは中日密教研究会の設立経緯とこの時点までの活動の詳細についてまとめたものである。田中の記述にはこれが、藤崎三郎助ら田中の支援者たちに、今回の中国行の報告書を出版するべきだと勧められて生まれたものであることがうかがわれる（田中編『依宗教日支親善』、110-111頁）。会見や式典などで記念に撮影された写真が豊富に挿入されており、当時の様子を画像によってもうかがい得る貴重な資料であるといえる。これはこの年、昭和天皇に献上され²⁹⁾、翌年には満洲国皇帝にも提出された。皇帝溥儀との間に立ったのは、上述の桑島主計であったという（『高野山時報』第699号、28頁）。6月25日、北京でパンチェンラマと田中の仲介に尽力した矢野真が田中を訪問し、翌年の高野山の法

会へのパンチェンラマ招待について話し合いが持たれた。

9月8日、田中がパンチェンに「二十五條僧伽梨衣」1領、前掲『依宗教日支親善』300冊、自著『感光』100冊、「瑞穎照像」1枚を贈った。この日付で、吉井芳純が北京のパンチェンラマ事務所代表羅氏(羅桑楚臣)に手渡したという。パンチェンラマからは、「御自身御着用の新しき国宝的僧伽梨衣」が返礼に送られてきた(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、18頁)。9月9日付田中宛吉井書簡には、前日の贈り物の件と、班禪招請の進捗についての報告がある。それによると、日本招待の件を聞いて事務所代表も非常に喜び、「早速法王へ特使を立て模様を聞く」との返事であったという。吉井は日本訪問が実現するとすれば、パンチェンラマ一行は「最少限度に於て五六十名に相成る由に候」と報告している(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、42頁)。

1934(昭和9)年4月にはパンチェンラマへ、田中の自著『錫杖の光』が送られた(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、48頁)。パンチェンラマからは同年12月に、パンチェンラマ肖像写真1枚、金銅仏1体、「法王御着用二十五條僧伽梨衣」1領、「鳳眼菩提念珠」1連、「紺紙五泥喇嘛經」13葉、箱入り「頂上藏貢香」(員数不明)、箱入り「頂高藏香」(員数不明)、箱入り「頭貢藏香」(員数不明)、チベットの儀礼用スカーフであるハタ1枚が送られてきた(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、48-9頁)。

この年に入ると、パンチェンラマ、真言宗、もしくは仏教等に限定されない、大陸との広い交流の軸としての役割を、田中が担い始めていたと考えられる。例えば4月には、上述の弘法大師千百年忌のため王揖唐が来日、4月27日に静岡を訪れ、中日密教研究会静岡支部が置かれている清水寺の本堂を、「日華親善殿」と命名した。翌日には東京で王の歓迎会が開かれ、清浦奎吾伯爵、床次竹二郎通信大臣などの政治家、服部宇之吉、三上参次等の学者など、「朝野名士百余人」が参加した(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、92頁)³⁰⁾。6月には、北インドの王族であり、当時日本を拠点としてアジア各地の独立運動を支援していたマヘンドラ・プラタップが田中を訪れた(『高野山時報』第699号、28頁)。8月にはこのプラタップが同行し、汎太平洋仏教青年大会のインド代表であるスワミ大僧正³¹⁾と田中が東京で会見した(『高野山時報』第707号、20頁)。

翌年、1935(昭和10)年年明け早々、田中は再びパンチェンラマへ、金剛界曼荼羅1幅、金剛胎藏両界曼荼羅2幅、香盒1個、硯箱1個、茶器1個、釣箒1個、法幡2流、「塗金銅靈芝置物」1個、盆1個、打敷1枚、水晶念珠1連、漆塗盆1個を贈っている(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、51-7頁)。翌年、パンチェンラマは帰国する吉井芳純に、田中への贈り物をことづけた。すなわち、観音像1体、「無量寿壇城」一座、「聖鉢」1個、如意1個、サフラン一箱、チベット絨毯1幅、チベット香料二股、ハタ1枚である(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、64頁)。

また1936(昭和11)年11月に、中日密教研究会会長であった段祺瑞が死去したため、12月20日、清水寺内の日華親善殿で、追悼法要が開かれた。この法要には、許世英駐日大使、静岡県知事などが出席した。記念撮影ののち、同会静岡支部理事長である八木雄馬陸軍大佐の渡支壮行会、東京東亜聖蹟調査会渡辺天洋氏のチベットに関する講演があったという(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、

80-81頁)。翌日は田中の還暦祝いが行われ、五台山普化仏教会長である王春暄が招かれて出席した。これにはパンチェンラマも祝いの挨拶状と「黄緞寿帳」、カタを送っている(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、66-68頁)。

翌年1947(昭和12)年に入って早々、田中はモンゴルのチベット仏教活仏章嘉呼図克図に自著を贈った(『高野山時報』第793号、23頁)。章嘉呼図克図は主に内蒙古を本拠とする転生活仏で、ダライラマ、パンチェンラマに次ぐ宗教的権威を持つ。6月には日華親善殿が、鉄道省の「静岡観光名所」に指定された(『高野山時報』第809号、20頁)。

この年12月1日、前述したように、パンチェンラマはチベット帰還の途上、ジェクンドで逝去する。田中宛には、パンチェンラマ北京事務所代表により、17日付で通知書が出され、22日に田中の手元に到着している(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、69頁)。それを受けて田中は24日付で、同代表宛に「哀詞」を送った(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、70頁)。

年が明けて1938(昭和13)年1月、同事務所代表は再び田中に、パンチェンラマの遺影その他を送った(田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、70-1頁)。中日密教研究会静岡支部では、同月18日、パンチェンラマ追弔法要を営み、故人をしのんで『班禪喇嘛追悼余光』を編集、3,000部を刊行して、国内外の関係各所に送った。

パンチェンラマの逝去後も、田中と大陸との関係は続き、1月25日には、前出の八木雄馬大佐を、再度支部代表として中国へ派遣し、中国の要人と会見させている(『高野山時報』第827号、73頁)。5月には、来日中であった中華民国臨時政府の行政委員会委員長で、天津市長も務めたことのある王克敏を田中が訪問した(『高野山時報』第840号、22頁)。翌年1939(昭和14)年には、蒙古連合自治政府の一行33名が、日華親善殿を訪れ田中と会見した。この時中日密教研究会の大同への進出が内定したという(『高野山時報』第882号、20頁)。1940(昭和15)年には静岡市を見舞った大火の被害に対し、王揖唐が300円の救援金を田中宛に送り(『高野山時報』第904号、16頁)、また田中がその組織化に努力していた日華親善殿護持財団のために、2万5千円の寄付金が集まったと報じられている(『高野山時報』第901号、22頁)。しかし田中は、それからまもなく、1941(昭和16)年11月9日、世を去った。

5. おわりに

田中の中国行きと、その後の彼の活動は、一時的ではあるが、真言宗と「喇嘛教」との間に密接な関係を築き得たと言える。

この要因としては、田中の僧としての学徳に加え、彼の人が持つ影響力の大きさを、無視することはできないと思われる。例えば1932(昭和7)年の田中の中国訪問の際、天津で彼の講演を聴いた天津実業専修学校校長山川真は、公演後『天津日報』に「田中清純師の講演会に就いて」と題して寄稿しているが、その中で、「内ヶ崎作三郎先生や横堀工学博士等も宗門の信者といふより清純老師信者」(田中編『依宗教日支親善』所収、86頁)と述べている。内ヶ崎作三郎(1877-1947)は当時衆議

院議員、横堀治三郎(1871-1938)も当時やはり代議士であった。この二人に対し、山川が「清純老師信者」という表現を使用していることには、田中が宗教者として持つ影響力の大きさの一端をうかがうことができるだろう。このような影響力は初対面の矢野真参事官や、段祺瑞等中国側の人々にも及んでいる。例えば矢野は、田中を「清僧」と表現しているが(田中編『依宗教日支親善』、22頁)、そこには田中に対する崇敬の念が感じられる。田中とは北京が初対面であったが、お互いの帰国後も複数回の訪問があり、関係が維持されたことがうかがえる。

しかし、このような関係は、田中と当該人物との間の個人的なレベルにとどまるものであり、パンチェンラマとの場合も、田中・パンチェンラマ両者が数年後に死去したため、短期間のものとならざるを得なかった。しかし一時的とはいえその関係は、田中とパンチェンラマ、もしくは真言宗と「喇嘛教」にとどまらず、中国の政治家、日本の政治家、実業家、外交官などを巻き込んで広がりを見せたものであったと言える。今後は、田中の個人資料に関する調査とともに、高野山や真言宗各派の動きをもふまえ、東アジア近代史において田中の活動を検討し評価する必要があると思われる。

注

- 1) その最初のもは“Lamaist Buddhism and the Japanese Occupation of Mongolia” (Master’s thesis, University of California, Berkeley, 1953) である。この点についての直近の研究は“Japanese Expansion and Tibetan Independence” (*Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*, edited by Li Narangoa and Robert Cribb, London, New York, Routledge Curzon, 2003, pp.69-89) である。
- 2) 参照されているのは、野元甚蔵「入蔵記」である。現在は出版されている(野元甚蔵『チベット潜行1939』悠々社、2001年)。しかし房が参照したのは外交史料「西藏問題及事情関係雑纂」中の「入蔵記」(国立公文書館アジア歴史資料センターレファレンスコードB02031842900, B02031843000) だと思われる。また書名は明示されていないが、上海副領事であり、当時蒋介石政権に関する情報収集活動において中心人物の一人であった岩井英一の記述、恐らく『回想の上海』(「回想の上海」出版委員会、1983年)も参照されていると思われる。
- 3) 例えば、「外交時報社の主催で霞山ビル」(上掲『回想の上海』、382頁)で行われた講演会を、「日本外務省で行われた」(50頁)とする等、原典と食い違う部分がある。
- 4) 先行研究において本稿と関連する部分を以下述べる。昭和期の大陸における真言宗の動きについては、ナランゴアが「喇嘛教研究所」および、モンゴル人等のいわゆる「ラマ留学生」について、特に1939年以降を中心に詳細に調査している (*Japanische Religionspolitik in der Mongolei 1932-1945*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998, pp.158-213)。この「喇嘛教研究所」については、昭和期の日本当局によるアジア各地での対宗教工作について広く調査を行った大澤広嗣が、「昭和前期における真言宗喇嘛教研究所の学術活動について」(『大正大学大学院研究論集』32巻、2008年、153-165頁)で詳述している。しかし両者とも田中清純の活動への言及はしていない。その他、秦は田中が1933年2月9日にパンチェンラマと会見した事実のみに触れている(『日本涉蔵史』北京、中国蔵学出版社、2005年、201頁)。
- 5) チベット仏教の有力活仏の日本招請計画は、すでに明治期に見られる。その一つが、日本人として初めてチベット領域に到達した一人である真宗大谷派の僧侶寺本婉雅(1872-1940)による、1900(明治33)年のグラライラマ渡日計画である。この寺本の活動については現在、白須浄真「1908(明治41)年8月の清国五台山における一会談とその波紋—外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊—」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部(文化教育開発関連領域)』第56号、2007年、55-64頁)、篠原昌人「明治時代の対チベット接近策—福島安正、寺本婉雅を中心に—」(『軍事史学』第45巻第1号、2009年、4-18頁)が最も詳細な考察である。その他、これら2論考をふまえたものに、大隈重信宛の寺本書簡を取り上げた高本康子「明治期日本と「喇嘛教」」(白須浄真編『大谷光瑞と

国際政治社会』勉誠出版、2011年、299-324頁、特に303-305頁）がある。

- 6) 1933（昭和8）年には、モンゴル地区で教育・医療などを行う民間団体善隣協会の創設者の一人である笹目恒雄（1902-1997）、また日本人初のチベット旅行記を書いたことで知られる河口慧海（186-1945）と、その教え子の橋本光宝がバンチェンラマと会見している。
- 7) この間の事情については前掲野元『チベット潜行1939』に詳しい。
- 8) 幽経義隆（虎嶺）は、1915年に生まれ、陸軍中野学校卒業後、駐蒙軍司令部に勤務した。1941年から1943年までは「ラマ教工作」、1943年から終戦までは、百霊廟、徳化において特務機関工作に従事した（幽経虎嶺『おかげさま一私の人生何十年』出版社不明、1985年）。
- 9) 満洲国で行われた「喇嘛教工作」全体のありようをうかがい得る資料としては、「満洲国興安局喇嘛教整備要綱」（以下「要綱」）がある。これは、明治大正期に浄土真宗本願寺派法主大谷光瑞に派遣されラサに留学し、太平洋戦争期には外務省に所属してチベット調査にあたった青木文教が執筆した報告書「西蔵問題ト其対策」（1941年12月27日付、外務省調査部第三課）巻末に付せられているものである。同「要綱」は、青木によれば、「公安局の当路によって『ラマ教整備要綱』と名づけて画策されたもの」（青木文教『西蔵問題』慧文社、2009年、200頁）である。従ってあくまで計画段階のものであり、幽経の回想記のように、実際に施行された内容を伝えるものではない。しかし、その内容は、幽経を中心に「蒙疆」で実施されたものと、「喇嘛教」の組織化と改善を進めるという点で、方針を同じくするものである。具体的には、「喇嘛教」の組織化としては、諸行政政策の「浸透」をはかるための新教団の編成、改善としては、僧侶の教育と資格審査による、僧侶数、寺院数総数の漸減を目指すというものであった。なお、同「要綱」は、上掲『西蔵問題』200-202頁に、「ラマ教整備要綱」として収められている。
- 10) 当時、外務省嘱託であった橋本光宝によれば、その日程は同年11月26日から28日までの三日間で、「ラマ教育の再検討」等が決定されたという（橋本光宝『モンゴル・冬の旅』ノンブル社、1999年、49頁）。橋本はほぼ同時期、すなわち同年（1942年）12月から翌年3月に、モンゴルの現地調査をしており、同書はその記録である。
- 11) 幽経の記述によると、1939年9月、猪口三蔵が「軍の後援をうけて」実施したものという（『おかげさま一私の人生何十年』、70-71頁）。猪口については詳細は不明であるが、彼は1935-7年に、満洲国とモンゴル人民共和国の国境画定のため行われた満洲里会議にも、満洲国側随員として参加しており（『外務省執務報告』第4巻、クレス出版、1993年、785-786頁）、1930年代後半の「満蒙」地域において、主にモンゴル関係の問題にかかわって活発に活動していた人物の一人であると推測できる。猪口については他に、陸軍軍人で満洲における活動経験を持つ矢野光二の「蒙古と私」付録思い出の人々（1977年11月付）を参照した。この資料は、長年モンゴル研究に尽力されてきた梅森貞氏の提供によるものである。記して特に感謝申し上げます。
- 12) これは、前掲橋本書に「外蒙の活仏」（72頁）とあることから、釈妙舟『蒙蔵仏教史』（上海仏学書局、1935年、筆者は江蘇広陵古籍刻印社、1993年を参照）において、「外蒙各呼図克図」のうち、「喀爾喀」の22人の活仏の一人として挙げられている「諾彦呼図克図」であると推測される（154頁）。
- 13) これは、「土觀呼図克図」を指すと思われる。「土觀呼図克図」は、チベット仏教において「駐京呼図克図」、即ち清代に国師などの名号を与えられ北京に駐錫した由来を持つ有力活仏の一人である（前掲釈『蒙蔵仏教史』、148-152頁）。
- 14) この「推戴式」については、前掲橋本書にも言及がある（94、98頁）。
- 15) この「見学団」については、戦時期内蒙古における真言宗僧侶の活動を調査した真下亨『内蒙華北幻想紀行』（鳥影社、1999年）にも言及がある（139-140頁）。
- 16) 外交史料館資料ファイル「西蔵問題及事情関係雑纂」中の、「総番号」6023、6026、6049、6050電信による。これについては秦『日本涉蔵史』にすでに言及がある（226頁）。
- 17) 岩井英一は、1899年に生まれ、1921年に東亜同文書院商務科を卒業、外務通訳生として外務省に入った。1938年4月、蒋介石政権に関する情報収集の拠点として、上海総領事館に本省情報部直属の「特別調査班」を新設した。
- 18) 多田の日記には、同年6月21日橋田（邦彦）文相と「雍和宮札薩ラマ」の会見に立ち会い、24日には東京帝国大学

に同ラマを多田が案内したとある（多田明子、山口瑞鳳編『多田等観』春秋社、2005年、56頁）。この「雍和宮札薩ラマ」は丹巴達札を指すものと考えられる。多田の日記には、更に翌年12月、「雍和宮札薩ラマ」と帝国ホテルで会見、参内、陸軍省その他に同行とあり（同、60頁）、丹巴達札が再度来日した可能性も否定できない。

- 19) これには少なくとも2種の留学形式があったことが、『高野山時報』その他の記述から明らかである。すなわち、一つは「満洲ラマ研究生」と呼称されるものであり、満洲国政府の外郭団体満洲国協和会の募集によるものである。この研究生は、高野山大学だけではなく、大谷大学、龍谷大学からも選抜されていたことが伝えられている。例えば1940（昭和15）年には高野山大学5名、大谷・龍谷大学5名（『高野山時報』第905号、14頁）。同研究生はまず、新京の「協和会中央本部中央練成所」で訓練を受け（『高野山時報』第875号、16頁）、その後「新京博済慈善總會」に入って「蒙古生活様式」による訓練を受けた（『高野山時報』第879号、15頁）。もう一つは「高野山ラマ研究生」と呼ばれるもので、これは高野山において選抜され、現地での配置その他は高橋大善が中心となっていたと見られる。研究生は厚和でモンゴル語の訓練を受けたあと（『高野山時報』第874号、21頁）、例えば何人かは「土黙旗公立蒙人学校」で教育を担当、その後各地の廟へ配置された（『高野山時報』第889号、7頁）。
- 20) 9月10-20日、烏蘭察布盟ラマ講習会が開かれ、この指導のために厚和の日本喇嘛研究本部の高橋大善、高野山ラマ留学生の内海勝慧、竹本寛隆が出席している（『高野山時報』第984号、15頁）。10月には高橋らが百霊廟に「日本語学校」を設置、現地僧侶対象の普通教育を開始した（『高野山時報』第988号、19頁）。
- 21) 例えば1940（昭和15）年1月と5月には、外務省からの要請で酒井真典が五台山へ派遣されている（『高野山時報』第898号、23頁）。
- 22) 例えば1933（昭和8）年に創設された、同会所属の研究所に相当する中日密教学院の学院長には、中華民国において交通総長等を歴任した曹汝霖（1877-1966）が任命されている。
- 23) 収録されているのは「密教が結ぶ握手 日本西藏両学生の交換」（『東京日日新聞』1935年3月7日付）、「日本文化に憧れて 相次ぐ留学生の群」（『大阪毎日新聞』1935年3月8日付）、「互ひに秘宝を交換 喇嘛両教の握手」（『東京日日新聞』1935年3月20日付）等である（田中、藤井編『班禪喇嘛法王追悼余光』、59-61頁）。
- 24) 田中の履歴については、『昭和五年仏教年鑑』（仏教年鑑社、1930年、508頁、『日本人物情報大系』宗教編第4巻所収、皓星社、2002年、26頁）、井上泰岳編纂『現代仏教家人名辞典』（現代仏教家人名辞典刊行会、1917年、295頁、『日本人物情報大系』宗教編第3巻所収、皓星社、2002年、194頁）を参照した。
- 25) 例えば、田中が中国へ出発する際には、現地での活動資金として100円を喜捨している（田中清純編『依宗教日支親善』田中清純、1933年、15頁）。
- 26) パンチェンラマとの会見を望んだ理由について、田中の記述には、「二十四日以来どういふものか班禪法王に会見したき気分してならず食後此事を参事官に語りしに快諾せられ」（『依宗教日支親善』、23頁）とあるのみである。
- 27) この会見の様子は10月30日付各紙に報じられた。例えば「班禪喇嘛と田中清純師会見」（『読売新聞』）、「田中清純師喇嘛と懇談」（『東京朝日新聞』）等。
- 28) 『班禪喇嘛法王追悼余光』には、この招待状手交時の写真が掲載されている（58頁）。なおこの頁には、パンチェンラマの「法城」としてチベット第二の都市シガツェにある「タシユランポ宮の偉容」と題した写真が掲げられている。しかしこれをパンチェンラマの本拠タシユランポ寺院とするのは誤りで、この写真の被写体はシガツェ城である。この写真は、青木文教の旅行記『西藏遊記』（内外出版、1920年）107頁所載の「シガツェ城」と同一のものと推測される。
- 29) 「本冊子御献上に就て」（『依宗教日支親善』表紙裏貼付、1933年6月30日付）には、「天皇皇后皇太后陛下へ献上方願ひ出でしに辱くも御採納の光栄に浴し」とある。
- 30) これについても、4月28日付各紙に報道がある。例えば「王揖唐先生歓迎会」（『東京日日新聞』）、「王揖唐氏歓迎」（『東京朝日新聞』）、「王揖唐氏と語る」（『読売新聞』）等。
- 31) これは、汎太平洋仏教青年大会にインド代表として出席していた「印度大菩提会主事バリシンハ・スワミ」（土屋詮教「過去一年の教界を顧みて」『仏教年鑑 昭和十年』仏教年鑑社、1934年、3頁）を指すものと思われる。

The Interaction between Lamaism and Shingon-syu ; Based on Materials left by Tanaka Seijun

KOMOTO Yasuko

Concerning the relation between Japanese people and Tibetan Buddhism, academic mentions are very limited to history of Tibetan studies in Japan or biographical studies about several Japanese who entered Tibet. However, especially during WWII, various activities to approach Lamaism were done by Japanese Ministry of Foreign Affairs, the military and several groups of Japanese Buddhism. But these activities also until now have never been known in academic circles.

In this paper, I deal with several materials left by Tanaka Seijun who was a monk belonged to Japanese Shingon Buddhism. He made contacts twice with Panchenlama who was one of the most important living Buddha in Tibetan Buddhism, in Peking after Manchurian Incident. Before Tanaka, several Japanese monks had already succeeded in meeting with Panchenlama, but Tanaka was the first person as high rank monk. The object of this paper is to examine these Tanaka's materials in order to cast some useful insight on Japanese activities concerning Lamaism in Wartime Manchuria, Mongolia, and China.